

コロナ禍を地域の遊び場は乗り越えられるのか：子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」の事例から

山下, 智也
北九州市立大学文学部人間関係学科

<https://doi.org/10.15017/6796354>

出版情報：生活体験学習研究. 21, pp.59-66, 2021-07-30. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

バージョン：

権利関係：

コロナ禍を地域の遊び場は乗り越えられるのか

— 子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」の事例から —

山下 智也*

1. はじめに

(1) 「一斉臨時休校」のインパクト

2020年2月27日、新型コロナウイルス感染症対策のため、全国の小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等に対して発令された「一斉臨時休校」は、子どもの環境に劇的な変化をもたらした。もちろん、その後の「緊急事態宣言」も、「ソーシャルディスタンス」や「外出自粛」といったワードも、子どもの環境に大きな影響を与えたことは間違いないが、この新型コロナウイルスの存在が子どもたちに自分事として初めて体感されたのが、この「一斉臨時休校」だったのではないだろうか。このインパクトある施策によって、我々が新型コロナウイルスに対する危機感を認識できたという側面もあろうが、子どもの視点に立ってみると、“学校に通う”という子どもたちにとって当たり前前の日常が揺らいだ瞬間でもあった。もちろん、子どもにとっては当初、ただ単に学校が休みになったという感覚でしかなかったかもしれない。しかし、安定して当たり前のようにあった環境が突如としてなくなるという危機的環境移行は、気づかないうちに大きな心理的負荷を与えてしまい得るものである。

(2) 子どもに関わる大人への衝撃

「一斉臨時休校」によって、子どもとともに日常を過ごしてきた大人たちの心にも大きな衝撃を与えた。

学校現場が混乱したのは想像に難くないが、それ以上に、休校中の子どもの過ごし方を工夫せざるを得なくなった家庭や、「一斉臨時休校」になるにも関わらず現場を開け続けることになった放課後児童クラブの現場には、安易に想像できないほどの負担がかかったに違いない。もちろん、保育現場や地域で

の子どもの活動等においても、日常の実践のルーティーンを変えていかざるを得ない局面を迎え、大なり小なり影響を与えたことであろう。

そして、地域の昔ながらの商店街の一角で、子どもの遊び場を日常的に開け続けてきた私たちにも、その波は押し寄せてきた。

元々、私たちが運営する子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」(福岡県福岡市東区)は、2004年に開設して以来、平日の放課後にほぼ毎日、地域の子どもたちが自由に立ち寄っては過ごす場として開放してきた。17年もの実践の蓄積から、地域の中では子どもが集う場として認知され、毎日15~20名程度は入れ替わり立ち替わり遊びにやってくるのが日常だった。スタッフは、元々学生団体だったこともあり、そのOBやOGを中心に、現役の大学生・大学院生(子ども時代に常連だったメンバーも含む)が数名常駐していた。

子どもが主体として遊べる場であるとともに、居場所としての役割も果たせたらという思いでこの場を開け続けてきたが、いざ「一斉臨時休校」という事態を突き付けられたとき、私たちの場のアイデンティティが改めて問われることとなったのである。

このような時期だからこそ、放課後児童クラブと同様に、子どもたちの居場所として場を開け続けるべきか。それとも、あらゆるリスクを避け、学校と同じように一時的にでも場を閉じるべきか。私たちが大切にしてきた思いと子どもの心のことを考えれば、迷うことなく前者を選択したいところではあったが、行政等の後ろ盾もなく、細々と実践を紡いできた私たちのような任意団体にとっては、感染症がもたらす諸々のリスクは実践の存続とも直結するが故に、“わからなさ”だらけの新型コロナウイルスを

*北九州市立大学文学部人間関係学科

連絡先: 〒802-8577 福岡県北九州市小倉南区北方4-2-1 E-mail: tyamashita@kitakyu-u.ac.jp

TEL: 093-964-4152



写真1. コロナ前の「きんしゃいきゃんぱす」の日常

軽視することもできない。私たちにとって、試行錯誤の日々が始まった。

(3) 本稿の目的

上記の通り、この「一斉臨時休校」発令を皮切りに、子どもたちの日常生活がどうになってしまうのかという不安や危機感が募るだけでなく、私たちはどのように実践の場を開け続けるのか、あるいは閉じ続けるのかということに悩まされることとなる。そのプロセスは、子どもの生活世界の変化を感じ取り続ける作業であるとともに、私たちの実践のアイデンティティを再考し続けるプロセスでもあった。そして今もなお、そのプロセスの真っ只中である。

本稿では、まだ終わりの見えないコロナ禍における、決してうまくいったとは思えない私たちの実践報告を綴ることとする。そのとき何が起きていたのか、私たちは何を気にしながらどのように実践の舵取りをしていったのか等、それらを備忘録として書き留めることで、これからの子どもたちの生活体験に私たちがどのように伴走していくことができるのかを熟考する契機にできればと考えている。

2. 私たちの実践の備忘録（時系列に沿って）

(1) 「一斉臨時休校」（2020年2～3月）

2020年に新型コロナウイルスが確認されて以降、私たちもその動向はなんとなく気にかけていたが、今思えば、まだ少し遠い世界の話として聞き流していたのかもしれない。

しかし、いざ「一斉臨時休校」という事態に直面すると、遊び場をいつも通り開けるのかといった判断を急遽迫られることとなった。当時は、2月27日（木）に「一斉臨時休校」が発表され、28日（金）は

子どもたちは通常通り登校、そして翌週の3月3日（月）からは一斉休校というスケジュールだった。私たちは、27日（木）の「一斉臨時休校」の報が入り次第、すぐに主要スタッフで相談し、翌日の28日（金）にいつも通り開けてよいのかを検討した結果、この日学校は通常通りあるということを拠り所とし、遊び場も開けることとしたが、学校が休校となる3月は、少なくとも第1週目は様子を見てお休みをすることとした。学校が開くかどうかを一つの基準としたのは間違いないが、28日（金）に意を決して開けることとした一番の目的は、3月1週目のお休みを常連の子どもたちに直接伝えなければと考えたからである。遊び場が開くのかどうかを気にしている子どももいるかもしれないし、一斉休校が子どもの心にどれほどの衝撃を与えているかもわからない。遊び場を休むことが子どもたちに“拒絶”として伝わらないように、スタッフから直接伝える手段をとることとした（こうやって省察することで、そこにも本実践のアイデンティティがあることを再確認できる）。

3月の1週目、“遊び場をお休みしたことが正しかったのか”等と悶々とした日々を過ごしながらも、2週目の3月9日（月）以降をどうするか、スタッフ間でやりとりをした。当時出てきた意見を、箇条書きで記す（括弧内は現時点から見た補足）。

- まだ十分に事態が落ち着いているとは言えないが、遊び場は半屋外なこともあり、換気性の高い場所で危険性は低めだし（あくまで当時分かっている段階の情報で）、こういうときの居場所の意義もあるので、開けたい気持ちはある。ギリギリまで様子を見て開けるかを判断したい。
- 判断は難しい。人の集まり方が違うとはいえ、屋外の花見にも自粛要請が出ている。確保が難しいかもしれないが、大人も子どももマスクを必須条件にするなど、最低限の感染予防をするべきでは（ただし、当時マスクは品薄状態だった）。
- こちらでアルコール消毒ジェルやマスクを用意し、来た子どもへの検温もすることにしては。
- 子ども用のマスクは調達が難しく、子どもがマスクをしていない現場もある様子。
- 福岡市の方針に合わせ、市が作成したチラシを掲

示して注意喚起しては。

- 放課後児童クラブで工作遊びとしてオリジナルマスクを自作している事例を聞いた。注意喚起ばかりではなく、楽しんで過ごせるとよいのでは。

これらの意見を踏まえ、3月9日（月）は、子どもたちには告知せず（通常は遊び場前に掲示している小さなホワイトボードで、次にいつ開くかを簡単にお知らせしていた）、感染予防対策をした上で、様子見としてこっそり遊び場を開けてみることにした。結果として、小学生はやはりそもそもあまり外出しておらず、たまに通るかかる程度でしかなかったが、かつて常連だった10代後半の子どもたちがちらほら立ち寄っては、大学合格や就職決定を報告してくれるなど、その嬉々とした表情を見ることができただけでも、この日に開けた甲斐があったと思わされた。きっと子どもたちも、人と会う機会が減り、嬉しさを共有する機会も大幅に失われていたのだろう。それに加えて印象的だったのは、ある常連の子どものご家族が通りかかったときのことである。その保護者が言うには、この一斉休校の最中、子どもが過ごせる居場所がなくて非常に困っていて（遠方の人の少なさそうな公園を探して行ってみても、そこはそこで人が大勢いたりする）、今日からこの遊び場が開くのが気になって立ち寄ったそうである。他の保護者ともメールでやりとりした際に、「こんなときこそ居場所が大事！」というメッセージを頂き、大きな励みとなった。

翌々日、常連だった子どもがふらっと遊びにやってきて、その声を聞きつけてか他の常連の子どもも徐々に外に出てきたようだった。ちょうどこの頃、文部科学省が「公園等の屋外での適度な運動は妨げない」という通知を出したことも追い風となり、その後も遊び場を細々と開け続けることとした。遊びに来るのは小学校高学年の子どもたちの姿が多く、低学年の子どもたちの姿はあまり見かけなかった。また、遊ぶ中でテンションが上がっていつも以上に大声を出す子どもや、やや攻撃的な言動を見せる子ども、あるいはスタッフにこれまでよりも過剰に関わりを求めてくる子どもがいたり、休校が長引いていることによるストレスや不安を垣間見せる子どもたちがいたのも印象的だった。彼らなりに必死に



写真2. 一斉休校時の遊び場の様子

今の状況に適応しようとしているものの、抱えきれないものが零れ落ち始めているように私には感じられた。

とはいえ、コロナ前に比べると遊びに来る子どもの数は少し減って10名程度だったものの、この頃はまだ、コロナ前の延長で遊び場を開け続けることができていたように思う。そして、この一斉休校の数週間を耐え抜けば、すぐに元の日常が戻ってくるのではないかといった楽観的な考えもまだ残っていたように思われる。だからこそ、子どもたちの一時的なストレスや不安に対しても、遊びを通して可能な範囲で発散してもらおうという程度の意識で、長期的な視野でこれらの現象を捉えることはまだできていなかった。

(2) 1回目の「緊急事態宣言」発令前後（2020年3～4月）

3月27日（金）、遊び場のある福岡市東区内で新型コロナウイルスの感染者が出たことが明らかとなり、私たちの遊び場は密室ではないにせよ、お互いの距離が近くなることを考慮し、いつも以上に慎重になろうという共通認識を図った。

その週末の29日（日）には福岡県に外出自粛要請が発表され、福岡市でも感染者数が増加傾向にあることに鑑みて、様子見も兼ねて遊び場を一週間程度閉めることを決断した。スタッフへのメールにも「一斉休校のときには、子どもたちの居場所として開けることの意味が大きかったものの、長期戦になってきた今はそれよりも、感染を拡大させないための足並みを揃える方が大切になってきたと思っている」

と書き記しており、短期戦から長期戦に切り替わってきたタイミングであったことが伺える。

その決断の背景には、当時は大学生の卒業旅行問題に代表されるように、若い世代の感染が注目されていたこともあった。この遊び場は、元々大学院生らで立ち上げたこともあり、地域の人々から「大学生が運営している」というイメージを持たれている。“感染リスクの高い高齢者が買い物にやってくる商店街で、若者が子どもたちをわざわざ集めている”と見られてしまうと、私たちのような任意団体はすぐにつぶれてしまいかねない（逆に言うと、商店街に場を開いているからこそ、周囲からどのように見られるかをこれまでも常に意識し続けていたことが改めて確認された）。子どもの遊び場・居場所は開け続けたいが、例えばもしここでクラスターが発生したらどのように責任がとれるのかという怖さも同時に抱えていた。

子どもたちにとっては貴重な春休み。その期間に遊び場を閉めることは苦渋の決断ではあったが、子どもたちにその旨を伝えるべく、お休み初日にベテランスタッフが現場に出向き、やってきた子どもたちに「少なくとも一週間程度お休みする」ことを直接伝えるとともに、貼り紙を通して他の子どもたちにも周知してもらうこととした。

そのスタッフの報告によると、その日は8人くらいの子どもたちが集まっていたとのこと。遊び場を一時閉めることを告げた際には、「えー!」「暇!」といった反発がひどく、「今日だけ開けて!」と懇願された一幕もあったようだった。今振り返れば、まだこの頃の子どもたちには、この状況を無思考で受け入れるのではなく、反発する力があったということでもあろう。スタッフの説得のおかげで、子どもたちはひとまず納得してくれたわけだが、このような子どもたちの声にどのように応えていくか、大きな課題が残された気分だった。

その後、残念ながら感染状況は収束を見せず、4月7日（火）には、ついに「緊急事態宣言」が発令されることとなった。お休みは一週間どころか、そのまましばらくは遊び場を閉め続けざるを得ない状況へと追い込まれていった。

(3) 1回目の「緊急事態宣言」期間中（2020年5月）

遊び場を閉めてから1か月。その状態が日常となり始めた5月初旬に、あるスタッフが私たちにこんな提案を投げかけた。「きんしゃいきゃんぱすのシャッターに、大きなホワイトボードを設置していいですか」と。コロナ禍で自粛も求められ、ストレスが溜まっているであろう今だからこそ、何か子どもたちにちょっとでも楽しんでもらえたらという思いで提案してくれたようである。早速スタッフでメールでのやりとりを重ね、オンライン会議を経て、実際に実現する流れとなっていった。当時の意見をいくつか箇条書きにして提示したい。

- 大きなホワイトボードシート（横2m×縦1m程度）に、落書きやスタッフからのメッセージを書けるようにしたい。
- 子どもが傷つくような落書きはトラブルになり得るため、注意書きが別途必要。
- しりとりや絵しりとり、連想ゲーム、なぞなぞなどをしてみてはどうか。
- スタッフは遊び場に立ち寄った際に、ホワイトボードシートの写真を撮ってスタッフ間で共有する。

会議のやりとりを聞きながら、こんなことを考えた。遊び場が閉まっていたことは、子どもたちにどのように受け止められているだろうか。このストレスフルな状況の中では、もしかしたら「遊び場を開けたくない」「あなたたちとは遊ばない」という、拒絶感にも似たメッセージに歪曲されて伝わってしまっているかもしれない。しかし、私たちが本当に伝えたいことは、『本当は遊び場を開けたい』『みんなとつながってほしい』ということではないだろうか。このホワイトボードシートを子どもたちとのコミュニケーションツールとして活用することで、私たちはみんなのことを思いながら、ちゃんと『いるよ』というメッセージを伝えたい。

ホワイトボードシート作戦はすぐさま実行した。シートを設置して数時間のうちに、早速しりとりが継続していたことにまずは驚いた。『つながっていたい』と思っていたのは、私たちだけではなかった。

しりとりが自然と連なっていく。その合間に、遊び場のスタッフから子どもたちのメッセージが書か



写真3. ホワイトボードシートの登場

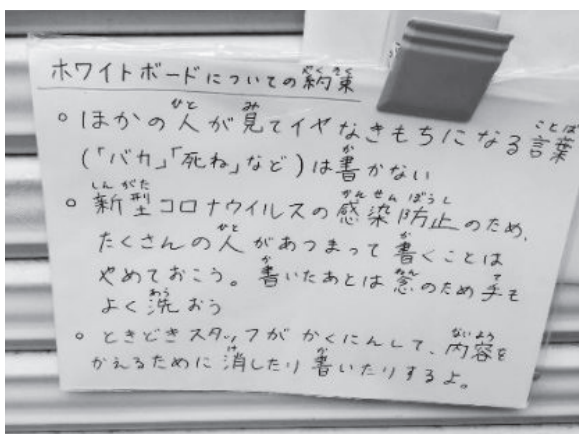


写真4. トラブル予防のためのお約束

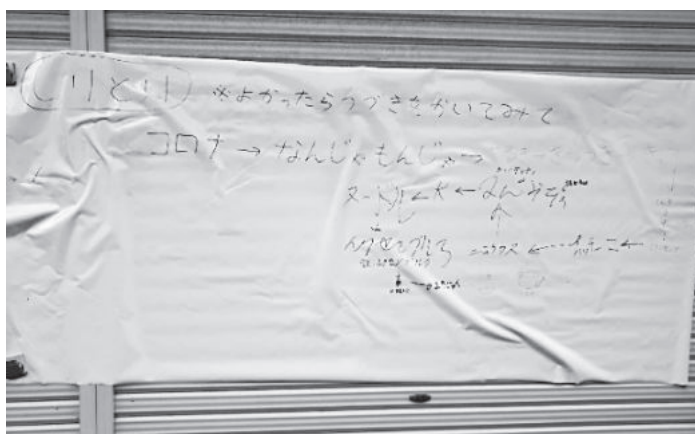


写真5. 数時間のうちにしりとりが連なっていく

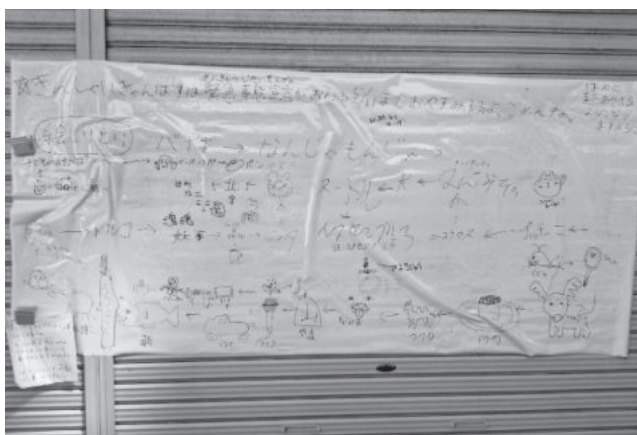


写真6. 絵しりとりやメッセージで埋め尽くされていく①

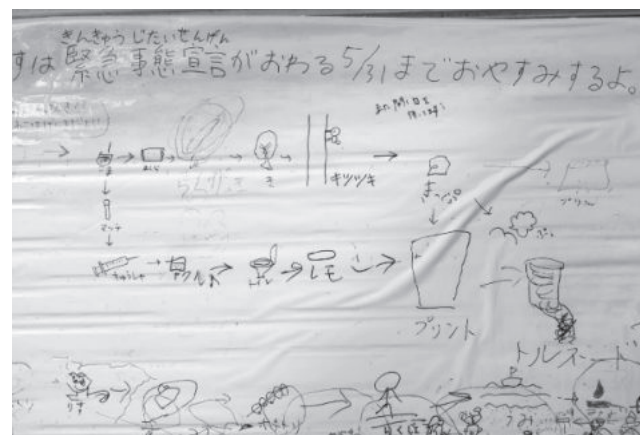


写真7. 絵しりとりやメッセージで埋め尽くされていく②

れたかと思えば、逆に子どもたちからスタッフへのメッセージも残されてもいた。どなたが書いてくださったかわからないが、「はやくまたあそべるようになりますように」「また開く日を待っています!」といったありがたい言葉も残されていた。子どもの身長で書けるスペースが少ないという若手スタッフの気づきを元に、貼る位置を調整したりもした。もちろん、時に子どもたちの落書きが度を越えることも

あったため、数日から一週間置きに記載内容をほぼリセットし、なぞなぞや絵描き歌クイズ、あみだくじといった、次の「お題」も提示した。こちらのなぞなぞに感化されてか、常連の子どもからのなぞなぞも提示されるなど、遊び場でいつも展開されていた遊びの連鎖も立ち現れていた。

ホワイトボードシートのメンテナンスの際に遊び場に立ち寄った際、子どもたちは近くの公園やマン

ション下で遊んでいたという。遊び場を無理に開けてしまうと、子どもたちは密になってしまっていただろう。そこで、ホワイトボードシートを介した仕掛けにチャレンジしてみたわけだが、ふと振り返ってみると、「ちょっとした遊びがきっかけとなって関係が紡がれる」「場が必要以上に荒れないようにさりげなくメンテナンスし続ける」「そもそも、私たち自身が楽しむ」といったこと自体、日常の遊び場の中で私たちが大切に続けてきたことそのものであったことにも気づかされた。

5月14日（木）に緊急事態宣言が解除された。しかし、まだ感染が収束しているわけではないことに加え、福岡市内の小学校も5月21日（木）から分散登校を段階的に開始したことに鑑みて、この遊び場においても徐々に日常に戻っていくための足並みを揃えることとした。ホワイトボードシートを介したコミュニケーションが生きていたからこそ可能となったペース配分だったように思われる。

(4) 1回目の「緊急事態宣言」が解除後から2回目の「緊急事態宣言」まで（2020年6月～12月）

では、いつからどのように遊び場を再開するのか。スタッフ間でミーティングを重ねた結果、以下の方針がまとまった。

- 6月から急に今まで通りではなく、段階的に再開する。
- 社会人スタッフも都合のつく6月6日（土）16～17時に短時間で開放。土曜日にもかかわらずこの時間に設定したのは、私たちの原点である放課後の感覚を大切にすることと、日中にマスクをつけっぱなしで遊ぶことでの熱中症リスクを軽減するため。
- 子どもたちが室内で密になって遊ぶのを避けるべく、シャッターを完全には開けず、路上が遊びの拠点となるようなゾーニングを行う。
- 次回予告のホワイトボードには、完全再開ではなく「少しずつ開ける準備をする」という表現を用い、状況に合わせた場の開き方をすることに。

このように、何をするにしてもリスク軽減を第一に考えた方針だった。見通しの立ちづらい時期だったとはいえ、必要以上に慎重だったのは否めない。

子どもたちのことを考えると、もう一步踏み込んだ対策ができたのではないかという悔いは残る。実際、当初再開予定だった6月1日（月）にスタッフが念のために遊び場に行くと、3名はやってきていて、遊び場が開くことを心待ちにしていた様子。慎重になるが故に、子どもの期待に応えられていない状況がもどかしい。

再開日の6日（土）。私自身は現場にいなかったのだが、開ける前から常連の子どもたちは近くの公園で遊んでいて、遊び場を開けるとわらわらとやってきたという。感染予防対策については子どもたちも慣れてきたのか話が通じやすく、きちんと対応してくれた様子。そして、主に路上で遊びを展開させ、騒ぐことなく穏やかに過ごしてとのことだった。久しぶりのきんしゃいキャンパスを体感してもらえたのではないかと思われる。ちなみに、誰もが自由に入出りできる場で、名簿等もないため、当日はいつも以上に写真撮影を行って誰が来ていたのかを把握し、万が一の際の感染ルートの確認ができるようにも尽力した。

その後は、週2回のペースで平日に開け続けることとした。さらに頻度を上げていくことも検討したが、ある若手スタッフからは「心配し過ぎるくらいに慎重にいこう」という声があがった。確かに感染者が発生したら、私たちの実践の存続のみならず、近隣の商店街にも影響が出てしまう。また、常に複数のスタッフを確保するためにも、ひとまず週2回のペースをキープすることとした。ただ、雨天時には室内で密になりやすいため、休みにすることも決定した。

当時の子どもたちの様子はというと、学校でマス



写真8. シャッターを半分閉めたまま遊び場オープン



写真9. この日は路上を中心に遊び場を展開

ク等が徹底されている反動から、マスクの着用がルーズになってしまう子どもも見られ始めた。遊び場の中で、どのようどこまで指摘するか、試行錯誤の関わりとなった。また、週2回というペースが影響し

てか、あるいはコロナ禍を象徴する変化なのか、遊びに来る子どもたちの数は、10名以下に減っていた。そもそも、放課後に子どもたちをまちで見かけること自体、かなり少なくなってきていたように思われる。

9月頃には週3回へと頻度を少しばかり増やしたものの、子どもたちの姿は大して変わらず、半年ほど前に“反発”をしていた子どもたちの姿が懐かしく思えるほどだった。秋になり、冬が近づき、暗くなる時間が早くなってくると、益々子どもたちの数は減り、5名程度が平均的な状況となっていった。放課後の子どもたちは地域から忽然と姿を消したと言っても過言ではないだろう。一方で、放課後児童クラブや福岡市主催の放課後等の遊び場づくり事業「わいわい広場」はにぎわいを見せており、行政が携わっている安心感から、保護者が子どもたちを預けるスタイルがさらに助長されたようにも思われる（わいわい広場は預かりの場ではないのだが）。

ちなみに、毎年恒例のイベントだった常連の子どもたちとのピクニックやプールも当然中止、頻繁に顔を出してつながりを築いていた学校行事や地域行事への参加もなくなり、私たちの現場そのものが孤立していった感覚も否めなかった。それでも、いつかまた毎日当たり前のよう遊び場を開け続けられる日が来ることを見据えて、細々とでも開け続けることだけに意識を向けた。この状況は12月末まで続いていくことになるのだが、このように見通しの立たない状況となると、これまで活動資金を助成金等に頼っていた私たちは、翌年度の助成金を獲得する

ことも難しく、資金面でも苦戦することとなった。子どもたちの数も、団体としてのパワーも先細りしていく不安は拭えなかったが、それでも、やってくる子どもたちはいる。遊びの合間に、学校や家庭での愚痴をこぼしたり、友達付き合いの悩みを吐露したり、自分の中で消化しきれない思いを攻撃性としてスタッフにぶつけてきたりと、子どもたちもそれぞれに、このコロナ禍のストレスと無自覚にも戦い続けていることを肌で感じるたびに、とにかくゆっくりのペースでもいいから、現場を開け続けることだけに尽力し続けた。

(5) 2回目の「緊急事態宣言」から3回目の「緊急事態宣言」まで（2021年1月～5月）

2021年1月13日（火）、福岡県に再び「緊急事態宣言」が発令されることとなった。以前の緊急事態宣言時と大きく違うのは、小学校等が休校にならないという点である。当然ながら放課後児童クラブも休まずに運営、ちなみにわいわい広場は全面的に中止となった。では、私たちの遊び場はどうするか。スタッフと相談をした結果、感染対策を強化・徹底しづらい場の性質を考えると、やはりお休みをせざるを得ない、という判断に至った。遊び場の近くに住むスタッフの報告によると、この期間中、放課後の子どもたちの姿はほとんどなかったようである。

2月の半ばに、様子見で、予告なしに少しかだけ遊び場を開けてみたことがある。そのとき、常連だった子どもたち数名がふらっと立ち寄り、「今日開いてるの？」と尋ねてきた。この遊び場のことはもう忘れられているんじゃないかといった不安もあっただけに、その関わり自体は嬉しかったのだが、一方で以前のような“反発”や“懇願”の姿はなく、地域を舞台に遊べない状況を当たり前ものとして受け入れてしまっている落ちつき払った子どもたちの姿には、考えさせられるものがあった。それでも、こうやってまた場を開けば、子どもたちが地域で遊ぶ日常も戻ってくるという見通しが得られたことも事実である。

2回目の緊急事態宣言が解除され、3月9日（火）から週2回のペースで遊び場を再開したが、子どもの数はさらに激減し、1～2人だけという日すらあった。それでも、かつて常連だった高校生や大学生が、



写真10. 子どもの数が少なくても遊び場を開け続ける

立ち寄りついでに将来の夢や進路先を詳しく報告してくれた。気づけばそんな年齢になっていたことを驚きつつ、この1年の空白の大きさを痛感した。急に入寮が早まって明日引っ越しになったことをわざわざ告げに来てくれた中学生もいた。期待半分寂しさ半分の表情をしっかりと受け止め、帰省時に再会することを約束した。4月に入り、新しいクラス環境にうまく馴染めず、SOSのサインを出してくれた小学生もいた。その日は1対1でとことん遊び切ることで、彼は笑顔で帰路につくことができた。遊びに来る子どもの数は激減したものの、その分一人ひとりの声に耳は傾けやすくなったし、こうやって場が開いていること自体に価値があるということを自分に言い聞かせながら、耐えしのぐ日々を過ごしている。

そんな日々も束の間、5月には3回目の「緊急事態宣言」が福岡県に発令されることとなった。再度ホワイトボードシート作戦をとるも提案したが、早めの梅雨入りのため断念。今（5月末）は緊急事態宣言が開けるのを、ただ待っている。

3. 差し当たりのまとめに代えて

コロナ禍が私たちの団体を衰退させたことは否めない。当たり前のように毎日を続け続けることができないため、助成金等の獲得も難しく、スタッフも新たに居つかない。もっと言うと、商店街自体への打撃も大きいはずである。実際に、同じ通りにあった店舗がまた一つ姿を消した。商店街自体がなくなってしまうと、私たちの実践も厳しくなる。地域の中で、任意団体として遊び場を開け続けることの難しさを痛感している。

そのような中、常に考えてしまうのは、このコロナ禍での実践の舵取りの判断は、本当にそれでよかったのか、という点である。子どもたちからの“反発”や“懇願”に対して申し訳なさを感じていたが、そもそもその声を子どもたちのSOSとしてきちんと受け止めることができただろうか。“つながっていたい”という思いも含め、それらの声をもっと実践に生かせなかっただろうか。もちろん、仕方なかった面もあると理解はしているが、そんな悔しさが付きまとう。

なぜ、子どもたちの“反発”や“懇願”が消えていったのか。上述の通り、私たちがその声をきちんと受け止め切れていなかったかもしれないという反省もあるが、もう一方で、子どもたちの適応力の高さが背景にあるのではないだろうか。学校が休校となり、自粛生活が強いられ、物理的にも社会的にも心理的にも距離がとられるようになり、当たり前にあった日常が姿を変えるとといった、ある種の危機的な環境移行が起こったにも関わらず、子どもたちはある意味でその状況にうまく適応してきたというようにも思える（むしろ適応しきれずに不安ばかりが増していたのは、私たちを含めた大人の方ではなかっただろうか）。子どもが今の状況に対して適応してしまえることは、ある意味でポジティブなこともでもある。しかしながら、「地域の中に遊び場がない」ことに適応してしまっているものか。「人との間に多様な意味での距離がある」こと自体に適応してしまっているものか。多様な「生活体験」の喪失に適応してしまっているものか。そもそも、これらの環境移行がもたらすストレスの弊害は、もっと長いスパンで見えていく必要があるのではないか。

奇しくもコロナ禍は、私たちの実践のアイデンティティを振り返る機会を与えてくれた。では、これから日常をどのように取り戻していくのか。いや、かつての日常を取り戻すというよりも、今回確認できた私たちの実践のアイデンティティを大切にしながら、これから新たな日常を紡いでいく必要があるように思われる。そして、このコロナ禍という環境移行が子どもたちにどのような悪影響をもたらすのかを伴走しながら見守っていくためにも、さらには私たちの実践の舵取りが正しかったと思える日がやってくるまで、やはり私たちは、地域の中で遊び場を開け続けるしかない。